

おりんと鈴

栗木ン
デ
イ

プロローグ

今から少しだけ昔、まだ飛行機が発明される少し前の時代の話をしていきましょう。

ある小さな村で、大変元気な男の子が生まれました。不思議な事に、男の子は右手に小さな金色の鈴を持って生まれてきました。

驚いた両親が、村の物知りおばあのところへ相談に行ったところ、おばあはその鈴を見て、ぽろぽろと大粒の涙を流しながら、こう話し始めたのです。

あんたら、白小虹川の土手にある桜の樹を知っておろう？
毎年美しい花を咲かせておるが。実だけは付けた事がないのう。
あの樹がまだなかった頃の話じゃ。
もちろん、わしも生まれる前の話じゃよ。

しばらく飢饉が続いての、食べ物もなく、貧しい村にはあまり子供が生まれなかった。
このままではこの村には誰もおらんようになってしまふ、と不安に思った村びとたちは
もみじ山の麓に立っておったお地蔵さんをお願いをしたんじゃ。

村人たちが、自分達の食べるもんも我慢して、お地蔵さんに供物を捧げたおかげか、
庄屋どんの家には元気な男の子が、村はずれの小作人の家にはかわいらしい女の子が生まれた。
小さな赤ん坊は村人たちの愛情を受けてすくすくと育っていった。
村のみんなは、いつかこの二人が愛を育んでくれると期待して見守っておったんじゃが、
庄屋どんのおかみさんは、その噂が気に入らなかった。
「小作人の娘とうちの息子だなんて、身分が違うじゃろうが、
隣村でも、もっと遠いところからでも、大金持ちのところから嫁をとらにゃ！」

そんなわけで、子供達は互いを知ることもなく、年頃を迎えたんじゃ。
しかし、運命とは酷なものよのう。
この二人には赤い糸がちゃんと繋がっておったんじゃ。
まわりでどんなに二人を会わせんようにと図っても、お地蔵さまの思し召しの方が強かった。
出会ってしまったんじゃな、しかも庄屋どんの息子の嫁取りの日に。

第1章

「あ、痛っ！」

大きな風呂敷を背負ってあぜ道を歩いていたのは、ようやく16才になったばかりのおりん。母親が夜なべして作った品物を、伍作のところへ届ける途中だったが、草履の鼻緒がぶつり切れて転んでしまったのだ。

おりんの白くてまあいひざ小僧が擦りむけて血が滲んでいる。

おりんは背中の荷物から白い手ぬぐいをひとつ取り出した。

おりんの母親は、草木染めで手ぬぐいに様々なきれいな模様を付ける名人だった。

その美しい模様が評判となり、今ではあちこちの村から依頼が入るようになっていた。

その手ぬぐいを小さく割いて、膝とぞうりに巻き付けると、よっこらしよ、と風呂敷を背負って歩き出した。

「ああ、かかさまの作った手ぬぐい使ってしもうた。怒られるなあ…。でもなんであんなところで鼻緒が切れてしまったんじゃろ？」

首をかしげながら、びっこひきひき歩くおりんの後ろから、小さな鈴の音がこっそりついて来ていることには誰も気付かなかった。

伍作の家では、たくさんの荷物を馬につけて、出かける準備をしていた。

「おりん遅いのう。庄屋どののところへ、はようこの荷物届けんといかんのになあ。」

庄屋の家では3日も離れた町の商家から、嫁が来るというので、朝から大わらわで準備をしていた。

「餅米はちゃんと蒸かしたかい！」

「その植木の形はなんだか縁起の悪い感じだねえ、末広がりにしておくれよ〜！」

「お膳の食器はとっておきのを出すんだよっ！」

「酒屋からお酒は届いたかい？」

庄屋のおかみは、祝言の準備をしながら自分の化粧にも余念がない。

「おかみさん、伍作のところの荷物がまだなんです」

「なんだい、伍作のところに頼んだのは？」

「馬のしっぽで作らせたほうきと、雑巾用の手ぬぐいです」

「なんだって！うちに来た嫁には必ず初日に家の掃除をさせる決まりなんだよ、遣いを出しておやり！」

肝心の庄屋の息子鈴彦は、朝からせわしない家の中でなんとなく居場所がなかった。

「はいはい、こっちは今から掃除しますんで、お坊ちゃま向こうへ行行って下さいね」

「坊ちゃん、いえこれからは若旦那さまと呼ばんといかんですな。お召し物が汚れますから庭に出ないで下さいよ」
なんだか子供扱いされるのもイヤだが、嫁が来るというのは、嬉しいような、なんだかも遊んではいけない、という責任感につぶされてしまいそうな、そんな複雑な気持だった。

手持ち無沙汰なまま鈴彦は縁側で、使用人たちが忙しく働いているのをぼんやり眺めていたが、ふと田んぼの向こうに何かが光ったように見えた。

「ん？今のは何じゃろう？キツネか、タヌキか？」

鈴彦はきっと気のせいだろうと思って、あぐらを組み直し、また退屈そうに座り込んでしまった。

第2章

もみじ山の麓、お地蔵様のもとに一匹の鈴虫が駆け寄って来た。

透き通った声で囁く。

「お地蔵様、鈴彦がなかなか腰をあげてくれませんよう。」

そこへもう一匹の鈴虫が駆け寄ってきた。

「おりんの足がなかなか早いのです。鼻緒を切って、できる限り足留めはしましたが、このままじゃ二人が出会えませんよう。」

お地蔵様はにっこり微笑んだまま動かない。

「お地蔵さまあ、鈴彦を連れ出すのに、私は力不足でございますう。」

鈴虫はさめざめと泣き出してしまった。

涙がひとつぶ、ふたつぶ、こぼれ落ちるたびに、それが光となり、鈴虫の羽根にキラキラと張り付いていく。

いつの間にか鈴虫の羽根は眩しいほどに輝きを放っていた。

「今一度行くがよいぞ。お前のその一生懸命さに神様が応えて下さったようじゃの」

お地蔵様のにっこり顔がウインクした。

大きなあくびを何度かした後、鈴彦は縁側にごろりと横になった。

目を閉じようかとうつつらうつつらしているその目の端に、見た事もないような美しい光がちらりと見えた。

「ん？またか、今日はなにやらキラキラ光るのう。」

それはまるで冬の朝の澄み切った空気が凍った時のようで、

キラキラと太陽の光りを受けて小さく輝いているのだが、

すぐに手のひらに捕まえられそうにも思えた。

光に導かれるように空に手を伸ばしながら外へ出た鈴彦に、気をとめる使用人は誰もいなかった。

一方おりんはようやく荷物を伍作のところへ届け、身軽になって家路を急いでいた。

その後ろをようやく離れずに追いかけているもう一匹の鈴虫は、

どうやっておりんを引き止めようかと悪戦苦闘していた。

そこへ遠くから光を夢中で追いかけてくる鈴彦の姿が見えた。

おりんはまったく気が付いていない。

このままではすれ違ってしまふ、と鈴虫が諦めかけた時、雷鳴が轟いた。にわか雨だ。

おりんは慌てて近くの大木の蔭に身を寄せた。

「あれあれ、さっきまであんなに空高く晴れとったのに、なんで急に雨なんか...」

鈴彦も木の蔭で雨宿りをしていた。

しかし、おりんのいる大木から並木5本分も離れている。

「なんでそっちの木に行っちゃうのよう！こっちだよ」

おりんについて来た鈴虫が、鈴彦を連れて来た鈴虫に一生懸命よびかけたが、

大粒の雨音にかきけされて届かない。

鈴彦を外へ連れ出した鈴虫はというと、急いでここまで飛んで来たもので、くたびれはてて、木の枝で息を切らして伸びていた。

「もう少しで捕まえられるところだったのに、雨のせいで見失ってしまったぞ。

確かにこの木にとまったように見えたんじゃがなあ」

きょろきょろと枝の間を覗き込む鈴彦の目に、数本先の木で雨宿りする、おりんの横顔が飛び込んできた。

なかなか子供の生まれないこの村で、年寄に囲まれて暮らしてきた鈴彦、若い娘を生まれて初めて見たのだ。

「なんかかわいらしい娘じゃ、あれは人じゃろうか？もしやきつねが化けとるのか？

いやいや、きっと天女に違いねえ！」

追いかけてきた光のことなどすっかり忘れて、鈴彦はおりんを見つめ続けた。

その頃、自分の嫁がしびれを切らして待っていることなどまったく思い出しもせず...

第3章

立派な馬に揺られて、大きなきらびやかな長持ちを従えて、花嫁はやってきた。角隠しの陰から見える横顔は、どうやらだいぶおいしいものを食べ過ぎたようでふっくらとして見える。

庄屋の家では、花嫁を迎えるその時に、花婿がいないことに初めて気が付いた。とにかく花嫁を座敷に通して、鈴彦を用人に探させている間も、庄屋のおかみは花嫁の長持の中身が気になってしょうがないようだった。じりじりと時間だけが過ぎて行き、すっかり日が暮れてから、ようやくよれよれになった鈴彦が帰ってきた。家の者たちがどうしたのか、どこへ行っていたのかと尋ねてもぼんやりして何も答えない。

とにかくずぶ濡れになった羽織を着替えさせ、祝言が始まった。祝詞や三三九度の間も、鈴彦は上の空で、されるがまま。村にとっても滅多にない結婚式で、まるで村祭のような大騒ぎは一晩中続き、鈴彦が自分の嫁の顔を見たのは、みんなが酔いつぶれて、静かになった明け方のことだった。その花嫁もすっかり酔いつぶれていびきをかいている。「こいつ誰じゃ？なんでわしの部屋におるんじゃ？新しい使用人か？随分と太っとるなあ。はあ、それにしてもきのうのあの娘にもう一度会いたいとう。天女なら羽衣じゃな、それを盗んでしまえば空には戻らんと聞いたことあるぞ。よし、明日探しに行こう。」

まったくのんきな鈴彦だ。これではおりんが鈴彦を好きになる可能性は低いな、と縁の下の鈴虫はため息をついていた。

さて、次の日、ほとんどお日さまが空の一番高いところに来た頃、ようやく庄屋の家ではみんながごそごそ起きだしていた。庄屋のおかみは今日も身繕いに余念がない。縁側から差し込む光を受けて、白粉が部屋中に舞っている。

鈴彦の部屋で目を覚ました花嫁、お松は、いつものようにお付きの女中が髪を梳いてくれるのを待っていたが、誰も来る様子がない。

そこへ便所から戻った鈴彦がやってきた。

お松は、ここでようやくはっきりと目が覚めた。

「あ、ここに嫁いできたんだったわ！」

慌てて寝床から起き上がり、三つ指付いて鈴彦に挨拶をした。

「旦那さま、お早うございます。ご機嫌いかがでございましょう。お支度をお手伝いいたします」

お松をただの使用人と思い込んでいる鈴彦は、何の疑問もなく着替えをさせた。

「お前、名はなんと言う？ゆうべは宴会でにぎやかじゃったから、お前もさぞ忙しかったろう。今日はゆっくり休め。わしはちょっと出かけてくる。」

お松は、鈴彦をなんと優しい男だろう、と思った。

お松の生家では、父が大変頑固な気紛れ者で、母も使用人も、主人の気を損ねぬように気を使って暮らしているのが当たり前だったので、

自分も嫁いだら、そのようにしなくてはならないと思い込んでいた。

お松の肉付きのよいその頬が少しだけ赤らんで微笑んでいる。

お地蔵様と鈴虫たちの想像もしていなかった、もうひとつの恋物語が始まろうとしていた。

第4章

おりんの家の庭では、大きな鍋をたき火にかけて、ぐつぐつと反物を煮込んでいた。

おりんの母の草木染めを手伝って、おりんも汗をかきかき火吹き竹を吹いている。

染めあがった布を冷たい川で洗い、側の低い灌木にかけて干してゆく。

その頃、鈴彦は昨日雨宿りをした並木のあたりまでやってきた。

あの光がまた現れないかと、繁った枝をかきわけ、覗き込むうちにあちこち小さな引っ掻き傷ができています。

枝の上の方に天女の羽衣がかかっているかと、木登りもしてみた。

きれいな着物がそこかしこほころびていく。

あの美しい娘の手がかりはまるで見つからないように思えて、川の土手に腰掛けた鈴彦は大きなため息をついてごろりと横になった。

空は高く、時々風に乗ってちぎれて飛んでくる雲が、あの娘の横顔に見えてくる。

爽やかな草の匂いを嗅ぎながら、鈴彦はそのまま川の土手で居眠りしてしまった。

おりんの方は忙しく母親の手伝いをしながら、ゆうべ見た夢のことを考えていた。

暗いところに一人でいるおりんの耳にかすかに鈴の音が聞こえている。

その音を追いかけてどこまでも歩いて行くと、明るい光の中に誰かが立っているのが見えるのだが、眩しくてその顔が良く見えず、すぐそこに見えるはずなのに、どうしても手が届かない。

普段はあまり夢など覚えていないおりんだが、目が覚めてからもなんだかずっと気になる。

あまり細かい部分はおぼろに霞んでしまっているのに、夢の人物の帯のあたりに小さな金色の鈴が光っていたことだけ、はっきりと脳裏に焼き付いていた。

ぼんやりしながら反物を取り込もうとしていた時、強い風が吹いて来た。

ふわりと舞い上がったうす紅色の反物が、おりんの手を離れて川向こうへ飛んで行ってしまった。

慌てて着物の裾をまくりあげ、川へ入り、追いかけて行くが、なかなか手が届かない。

随分走ったと思われた頃、反物がふわっと川の土手に舞い降りた。

息を切らして、ぼたぼた雫をこぼしているおりんが見たものは、昼寝をしている男の姿だった。

顔の上に反物がかかっているのに、どこの誰だかわからない。

しかし懐から小さなお守りが顔を覗かせており、夢で見たあの金色の鈴が光っている。

「あれま、正夢じゃ！」

おりんは思わず小さく叫び、その声に夢心地だった鈴彦がビクッと目を覚ました。

慌てておりんは反物をはぎとり、川へ走って行ってしまった。

寝ぼけ眼で鈴彦が見たのは、まるで天女の羽衣が風に舞うように飛んでゆく後ろ姿！

鈴彦は素早く立ち上がり、思わず追いかけた。しかしおりんはなぜ追い掛けられるのかわからない。

浅瀬でバシャバシャと水しぶきをあげて、小さな追いかけてこが始まってしまった。

しぶきに光が反射して、時々小さな虹がかかる。

おりんは一生懸命走ったが、反物を抱えていたこともあり、ついに鈴彦に追い付かれてしまった。

「待ってくれよ！」

「なんでうちを追い掛けるんじゃ～、なんも悪い事しとらんのに…」

おりんは川底でしりもちをついて半ベソをかいている。

はっと我に返って、鈴彦はおりんに手を差しのべた。

「すまんすまん、そうじゃないんじゃ、お前さまを昨日、並木で雨宿りしとる時に見かけての、天女さまかと思って追いかけてしまったんじゃ。」

天女さまだって！？おりんは自分がそんな風に見られたことがなんだかおかしくて、でもちょっぴりうれしくて、笑い出してしまった。

「うちもその話なら知っとるよ、羽衣を盗んで隠してしまう話じゃろ」

「そうそう！羽衣つかまえようと思って、俺あ走った、走った！」

「鬼が来たかと思ったわ、ああおかしい！」

二人はひとしきり笑い合って、それからようやく互いの名前を伝えた。

「なんじゃ、あの草木染めの彩さんとこの娘さんじゃったのか。しかし、こんな若い娘がおるなんてわしは知らなかったのう。」

「うちは、庄屋どんの家と同じ年の男の子がおるって、知っとったよ。でもなあ、意地悪だから遊んだらダメだって、おかんに言われとったのよ。

でも、鈴彦さんは、意地悪には見えんなあ。なあ、あんた昨日お嫁さん来たんじゃろ？えらいお金持ちのお嫁さんだっ
て村中の噂になっとるよ。」

そこで鈴彦はようやくハッと気が付いた。

今朝自分の身支度を整えてくれたのは、新しい使用人ではなく、自分の嫁だったということに。

第5章

「お地蔵さまぁ〜！」

あちこちの小石につまずきながら、ものすごい勢いで一匹の鈴虫が走ってきた。

おりんを見守るようにお地蔵様が派遣していた鈴虫だ。

「お地蔵様、はぁはぁ、おりんが、はぁはぁ、お地蔵様、ため息で、はぁはぁ...もう私うれしくてうれしくてえ」

「よいよい、わかっておるぞ、ちょっと落ち着くがよい」

優しい微笑みを浮かべたまま、お地蔵様は、鈴虫の鼻息がおさまるのを待っていたが、実はちゃあんとお見通しだったのだ。

鈴彦と出会ってからのおりんは、なんだか上の空でため息ばかりついていた。

お父にお茶を煎れるよう頼まれても、おかんに染め付けを手伝うよう言われても、返事ばかりでどうも動きがにぶい。

ご飯も半分くらい食べて残してしまう。

「おりん、あんたどっか具合が悪いのかい？」

おかんにそう言われて、ついにおりんは寝込んでしまった。

もちろんおりんは大した病気なんかではなく、ただの恋煩いだったのだが、おりんにははじめてのことで、何がなにやら見当もつかない。

「おかん、うち、なんだか胸のあたりがきゅーっと苦しくてな、ご飯が入らんのよ。こんなに苦しいの初めてじゃ。うち死ぬんかいのう。」

おりんの母親の彩は優しく看病しながら、自分の若い頃を思い出していた。

「おかんもな、若い時にそんな風になったことあるよ。大丈夫、死んだりせんから。」

おりんの母親は若い頃に、おりんの父親、染次郎に出会って恋におちたのだが、

実は彩には幼い時に両親が決めた許婚があり、親の反対を押し切って一緒になったのだった。

「おりんや、あんたの胸が苦しいのは、誰かを好きになったからじゃないかねえ。」

「好き？うちが？」

「そうよ、あんた誰のことを考えた時に一番胸が苦しうなるのか考えてみた？」

おりんは遠くを見つめてつぶやいた。

「鈴彦さん...、うち鈴彦さんのこと好きなんやろか？これって恋なの？おかん？」

彩は青ざめた。

生まれた時からずっと気を配ってきたはずなのに。

二人が出会わないように、村中で見守ってきたはずなのに。

この二人は、どこかで出会ってしまっていたのだ。

彩は、娘の叶わぬ恋を知り、不憫でならなかったが、今さらどうにもならないことは百も承知だ

った。

「そうかい、そうかい...、おりんや、それはなあ...恋なんかじゃなさそうだね。だって鈴彦さんは庄屋の跡取りだし、お嫁さんもおるしね。おりんの病気はただの風邪じゃね。おいしいもんたくさん食べて、楽しいこと考えとったらすぐ治るからのう。」

なぐさめながらも、彩にはわかっていた。
これがおりんにとってとても辛い青春の幕開けになることを。

おりんの両親、彩と染次郎が恋におちたその時代、
彩には生まれる前から親の決めたの許婚があった。
その相手、遼太郎とは、幼い頃から親戚のようによく遊ぶ仲であり、
親の決めた許嫁という認識は互いに持ってはいたのだが、
思春期を迎えた頃に、隣村から越してきた染次郎に出会った彩は、
瞬く間に恋に落ちてしまったのだ。

親の決めたことが絶対の時代、
自分の気持ちを抑え込もうとして、彩は病にかかり床に臥せってしまった。
このままでは彩が死んでしまうと悟った両親は、
渋々染次郎との仲を認めざるを得なかった。

しかし、大切な許嫁の彩を失った遼太郎は、すぐには諦め切れず、
なんとか彩の気持ちを引こうと様々な努力をした。
草木染めの材料になる珍しい植物を、命がけでとってきたり、
町でおいしいと評判のお菓子があれば、三日もかけて買ってきたりする。
しかも、染次郎のことを責めることはなく、彩の気持ちを傷つけるようなことはしなかったのだ。

彩は、自分を思ってくれる遼太郎の優しさに、心が引きちぎられそうな思いでいたのだった。
遼太郎がどんなによい人なのかわかっているのに、彩の心は染次郎に向かってしまうのを止める事ができない。

結局、遼太郎はこの村を離れて遠くの町に婿養子に入ってしまった。
なにやら羽振りのよい商いをやっているようだが、家のものとはしっくりいかず、
人が変わったようになってしまったと、風の噂に聞いたきり彩は忘れていたのだった。

遠い昔の甘くほろ苦い時代を思い出しながら、
自分の娘があの時と同じような道を辿らぬよう、彩は祈りながら、おりんを優しくなでてやった
。

第6章

漆塗りの立派なお膳に、豪華な料理が並ぶようになって1週間が経った。

「旦那さま、今日はお松が茶わん蒸しをこしらえました。これを食べれば元気が出ますからね。」

甲斐甲斐しく鈴彦の世話をやくお松に、庄屋の家のものたちは、

「金持ちのただの太ったおなごじゃと思うとったが、結構ちゃんと働くのう。見慣れてくれば、器量もそんなに悪くないように思えてきたぞ」

と噂していた。

庄屋のおかみは、嫁が働き者かどうかということよりも、

どれだけ持参金があるかということにしか興味がなかったので、

若夫婦がどんな様子だろうがさほど気にとめていない。

今日もおかみは白粉が飛び散らんばかりにお化粧をしている。

当の鈴彦はというと、やはり恋煩いにかかっていた。

お松はなかなかよい嫁だったし、何も困ることはなかったが、鈴彦はとにかくおりんに会いたかった。

あの鈴を転がしたようなかわいらしい笑い声が聞きたかった。

「お松、何か面白い話をしてくれんか？」

「面白い話でございますか、うーん、えーと...」

太い腕をぐぐっと組んで、一生懸命思い出そうとしている。

「ああ、ありましたありました！私の両親の話です。

うちの母は大変なきれい好きで、四六時中お掃除してるんですが、

ある日、押し入れの片付けをしていたら、文箱いっぱい詰まっている枯れ草を見つけたんですよ、

もうカビだらけで、母はくしゃみがとまらなくなっちゃって、ぐふふ、あはは！」

一生懸命話すお松には申し訳ないと思いつつ、

鈴彦はお松の笑い声とおりんの笑い声を心で比べてしまう。

「それでね、旦那様、母はそれを捨てに行く途中でまたくしゃみ！あひひひ！

その拍子に枯れ草を部屋中にばらまいちゃって、家中のものがくしゃみし始めちゃったんでございますよ、ぐほほほ」

お松はちょっと涙目になるくらい笑っている。

「ところがそこへ帰って来た父が、その文箱と枯れ草を見てものすごい剣幕で怒り出してね、

そりゃ、そこらじゅう散らかってるもんですから、当たり前ですよ。

うちの父は大変怒りっぽいんですよ、慌てて家中のものがそれを捨てようとしたんですが、なんと！父はみんなをその場で追い払って、

その草を、

カビだらけの！

みんながくしゃみするような草を、ですよ！

それを大事に大事に拾い集めて仕舞い込んでしまったの。はっはっは！

なんであんなゴミみたいな草を、大事にするんだか、うちの父っておかしいでしょう？」

お松は思い出して笑いがとまらない。

鈴彦にはきっとその草に大事な思い出があるに違いないと思えた。

「お松、きっとそれは父上にとって大事なものだったのではないのかのう？」

「まさかそんなことはありませんよ、あとでこっそり母が行商人に見せたんですが、

1 銭にもならなかったって嘆いてましたし、ひやははは。」

お松にも鈴彦にも知る由はなかったが、

その父親こそ、おりんの母、彩の許嫁であった遼太郎その人であり、

文箱に大事にしまっていたのは、染めものに使う植物だったのだ。

第7章

おりんは、母親の思いやりあふれる看病のおかげで、少しずつ元気になっていた。

「風邪をひくってのは、随分と苦しいものなんじゃなあ。」

小さな胸に手をあててつく、おりんのため息は大分小さくなっていた。

おりんは自分が恋煩いをしていることにすら気付かないままに暮らしていたが、何も用事のない時にはいつもあの河原へ行く事が多かった。

風に吹かれて土手に腰掛けていると、透き通った鈴の音が聞こえる気がする。

川面に映るキラキラした日射しが、あの鈴の輝きにも見える。

うす紅色の反物を染めた時には、いつも風になびかせてみることにしていた。

そうしてあの出会いから1年が過ぎようとしていた頃、その河原に鈴彦がやってきた。

「おりんちゃん！元気だったかい？」

鈴彦は小さな何かを抱えていた。

それは生まれたばかりのかわいらしい赤ん坊だった。

「鈴彦さん、あれあれ、久しぶりに顔見たと思ったら、庄屋どん自ら子守りだなんて珍しいこともあるもんだ」

「う、うん...」

「うちにも抱かせてくれる？」

その赤ん坊を抱くおりんの横顔を見ながら、鈴彦は、

これがおりんと自分の子ならどんなにかよかっただろう、と思っていた。

そしておりんも赤ん坊を抱きながら、鈴彦に触れているような、ちょっと複雑な幸せを感じていた。

そしてこの日を境に、暇さえあれば鈴彦とおりんは、この河原で逢い引きを重ねるようになっていったのだ。

それは、ふたりにとってとても幸せな、でも不安な時間でもあった。

お互いを愛しあっていることは、川の水も、水面を渡る風も、風に揺れる草花も知っているのに、それが許されない恋だということは、その川面のきらめきより明らかだった。

二人の逢い引きは、間もなくお松の知るところとなってしまった。

最初は天地がひっくり返ったような怒り方で、家中の障子をみんな破ってしまった。

次は湖をひっくり返したような涙の洪水で布団をみんなだめにしてしまった。

お松は本当に鈴彦のことが好きだったのだ。

しかし、どんなに怒っても、悲しんでも、鈴彦の心が自分になんか分からないことがわかると、最後には黙り込んで、漆塗りの大きな長持に荷物をまとめはじめってしまった。

慌てて庄屋のおかみが引き止めたが、すでに呼んであった籠に乗って、お松は実家へ帰ってしまったのだ。

実家でお松をなぐさめ、説得したのは、父遼太郎だった。

遠くを見つめ、白いものが混じり始めた顎ヒゲをなでながらお松に語り始めた。

「お松、泣くでないぞ。諦めたら負けだ。

わしは若い頃、好きなおなごがおったんだが、他のやつにとられてしまったんだよ。

辛くて辛くてそこから逃げ出してしまった。

でもな、この年になってよく思うんだよ、お松。諦めずに側にいればよかった。

自分を思ってくれんでもいい、好きな人の側で、その笑顔を見て暮らしたかった、とな。」

いつも怒ってばかりで気難しいと思っていた父親に、こんな青春の思い出があったと知り、お松は心が軽くなっていくような気がした。

「よいか、お松、鈴彦のことを好きなら離れたらいかんぞ。そして愚痴をこぼしてもいかん。

お前は少々器量は悪いが、優しい娘だ。お前さえ諦めなければ鈴彦は必ず戻ってくる。

わしの分もしあわせになっておくれ。」

怖い顔だとばかり思っていたが、

良く見ると父遼太郎の笑顔はとても柔らかかだということに気が付いたお松は、にっこりと微笑み、頷いた。

そしてお松が新たな気持ちで鈴彦のもとに帰ろうとしていたその頃、おりんと鈴彦は悲しい運命に翻弄されようとしていたのだった。

第8章

小白虹川の河原に一艘の小舟がつけられた。

すでに鈴彦とおりんの恋仲は村じゅうに知れ渡っており、村人のほとんどは、心の中でこの二人が結ばれば良いと願っていたので、誰も表立って責めようとはしなかったが、庄屋のおかみの手前、みんなが困ったふりをしていた。

「さあ、おりん、船に乗るんだよ。鈴彦の側にいられちゃ困るんだよ。ちゃんとした妻も子供もいる身なんだ。これ以上鈴彦を苦しませないでくれ。」庄屋のおかみはたいそうな剣幕で白粉と唾を飛ばしている。

「鈴彦、ちゃんとおりんを追い払って、お松を迎えに行くんだよ。大事なお嫁さんだからね。」

村人たちは、とりあえずこの場を収めて、後でおりんをこっそり迎えに行くつもりだった。おりんが静かに船に乗り込もうとした時、鈴彦は懐から、あの金色の鈴のついたお守りを取り出して、おりんに渡そうと手を伸ばした。そしてそれを受け取るために手を差し出したおりんの手を、鈴彦がぐいっと引っ張った。

船はぐらりと揺れて、おりんは河原にほうり出された。その瞬間、鈴彦は岸を蹴っ飛ばし、自分が船に乗り込んでしまったのだ。

「俺がこの村を離れる。さあ、みんな帰れ帰れ！おりん、元気で暮らすんだぞ、かあさん、お松を頼んだぞ。」

みるみるうちに船は遠ざかり、鈴彦の声はもう村びとに届かなくなってしまった。あっけにとられる村人たちに囲まれて、庄屋のおかみはさめざめと泣き出した。お金持ちの嫁を引き戻すことこそが、息子鈴彦のために一番よいことだと信じていたのに、肝心の一番大事な息子がいなくなってしまうなんて…。

おりんも同じだった。鈴彦の幸せを願ったからこそ、自分がこの村を離れる覚悟をしたはずなのに…。

数日後に戻ってきたお松も同じだった。鈴彦が誰を思おうと、側にいようと決めて帰ってきたのに…。

物知りおばあは、ここまで語ると思いきり鼻をかんだ。

みんな幸せになりたいのに、愛する人に幸せになって欲しいと願っているのにのう。

あんたら、お地蔵様がなんか間違っただと思うとるかいの？

そうじゃねえ、お地蔵様ってのは、あたしら人間なんかよりずっと長い事世の中を見ていなさるんじゃよ。

おりんはな、鈴彦がいなくなってから、ずーっと川岸を離れんかったんじゃ。

鈴彦に出会ったこの場所で、もう一度奇跡が起こると信じて待っておった。

お松とおかみは屋敷に戻り、しばらくは泣いて暮らしておったよ。

お松はだいぶおりんのことを恨んでおったが、お松には、鈴彦の子がおったでの、子供を可愛がることで、少しは紛れたんじゃろうな。

第9章

ずーっと河原におりんが立って川下を眺めているのが当たり前の風景になってから何年も何十年も経った。

もうおりに声をかける村人もおらず、
おりの両親も年老いて亡くなってしまい、
あの悲しい事件を知っている村人もいなくなってしまった。

そんなある晴れた日に、小白虹川の土手に年老いた旅人がやってきた。
ボロボロの着物にこぶだらけの杖をついて、
河原の桜の木の下に腰掛けて懐かしそうに川面を眺めていたが、
桜の木陰で鈴虫の奏でる声を聞いているうちに、うとうとと眠ってしまった。

夢の中で、旅人は、天女のような美しい少女を見た。
かわいらしく、鈴のように笑い、川の水しぶきを虹に変えてはしゃいでいる。
しかし、突然少女は川岸に上がり、動かなくなった。
少女の白い細い足が、みるみるうちに太く遅しくなり、地中にもぐっていく。
暖かだった指先が細くしなやかに天を向いて伸び上がってゆく。
少女は、あっという間にしっかりと根を張った桜の樹になってしまった！
まるで活動写真の早回しのように、季節が巡ってゆく。
小さな蕾がそこかしこに膨らみ、見る間に薄紅色の花が開いてゆく。
満開の桜の花びらは、なぜかみな川下の方を向いて咲いている。
風に吹かれて花びらは舞い散り、小さな実をつけてゆく。
それはキラキラと光を受けて輝く小さな鈴になり、チリンチリンと揺れながら、旅人の上に降り注いだ。
金色の鈴に包まれて旅人が夢うつつを彷徨っていると、鈴の音に運ばれて優しい声が聞こえてきた。

「鈴彦さん、うちずっと待っておったよ。また会えてうれしい。
うち、今度生まれかわっても必ず鈴彦さんを見つけるからね。
鈴彦さんがちゃんと見つけれられるように、この鈴を握って生まれてくるからね。」

はっと目を覚ました旅人は、もたれかかっていた桜の樹の根元を掘った。
そこから出て来たのは、小さな金色の鈴のついたお守りだった。

「おりん、すまない、迎えに来るのが遅すぎた....。」
旅人、いや、年老いた鈴彦は、桜の樹の根元で、泣き崩れた。

「おりん、お前の、そしてみんなのしあわせのために、もう会わん方がいいと思っと思った。
しかし、間違いじゃった。
生まれ変わったなら、かならずおりんを探し出すからの。
今度こそ一緒になろう。わしも必ず鈴を持って生まれてくる。きっと見つけておくれ。」

最終章

物知りおばあは、涙でくもった眼鏡をハンカチでごしごしこすり、
若夫婦はわが子と、その子が握りしめていた鈴を見つめた。

「では...この子が鈴彦の生まれ変わりなんですね。」
うんうん、と頷きながら、おばあは、赤ん坊を愛おしそうになでてやった。
「遠い昔に引き離されてしまった恋人たちのためにも、私たちおりんの生まれ代わりを見つけて
あげます。
おばあ、ありがとう。」

夫婦と子供が帰った後、おばあは重たい足を引きずりながら、河原の桜の根元へやってきた。
桜にもたれて、おばあは独り言を言いながら目を閉じた。

あの夫婦には言わなかったけどね、
実はおりんはもう生まれ変わっておったんよ。少し早過ぎたようだがね。
今度こそ、ちょうどいい家に生まれかわれるように祈っておいてもらえばよかったかもしれんね
。

鈴彦さん、うち、すぐに生まれ変わるからね、待ってね。

おばあのしわがれた指が、力なく草むらに落ち、握られていた手のひらから、
小さな金色の鈴が転がり落ちていった。

皆さんは生まれ変わりを信じますか？
もしかしたら、今あなたの隣にいる愛しい人は、遠い昔にも愛しあっていた人かもしれませんね
。
お話はこれで終わりです。
あなたの大事な人を見つけられますように。